



問題提起

山を切り崩し、土地を造成し、墓地を開拓する。そんな自然破壊を、私たちは見て見ぬふりをしてきた。自然と人間の共生とは何なのか。「生者の団地」だけでなく、「死者の団地」にも目を向けてほしい。

緑の地が、灰色の地に変わった現在の墓地を、疑に戻そう。未来の山が、墓石の山となる前に・・・

背景

少子化・高齢化により、先祖代々の墓を受け継ぐ人が減っている。部会に個人の墓が増え、墓石の数も増えてゆく。

墓地を「団地」と称して、山から平坦な土地を作り出す。山のない部会では、高層の墓地が増えすぎた。

墓のために自然を削し、置き場所を確保することが、「消費している」といえるだろうか。

多宗教の日本は、葬送方法も自分らさきを考えるようになり、最近では、葬儀、樹木葬、直葬、家族葬など、様々な葬送法が考案されている。

昔、日本は土葬しており、墓石を立てられなかった。その後火葬が広がり、石が収容する心配がなくなると、石を立てる文化が始まった。しかし、昔ながらの証であった墓石は、今では高価な材料を用い、装飾され、墓人の地位を象徴するものとなっている。また葬儀においても、その豪華さが墓人の偉大さを表しているという風潮もある。

本当の供養とは何なのか。

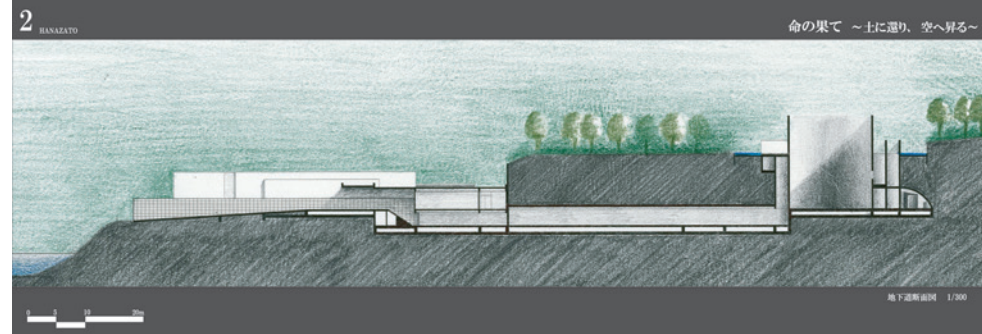
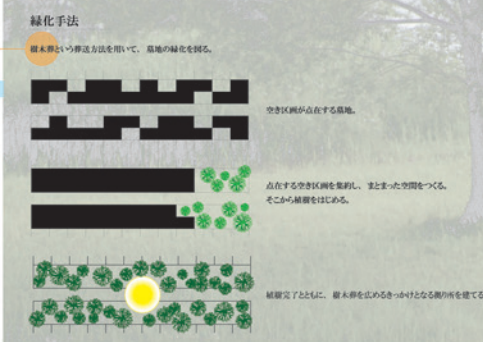
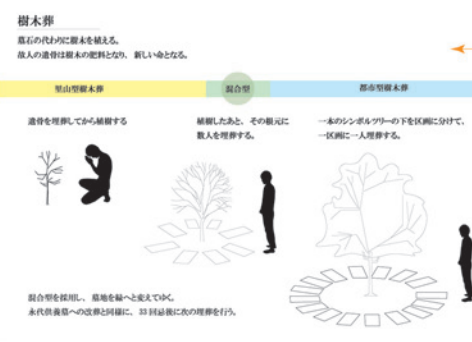
戒名はなぜつけるのか。

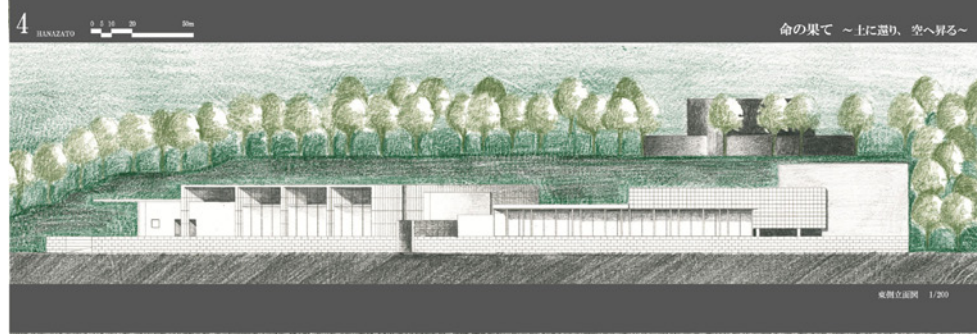
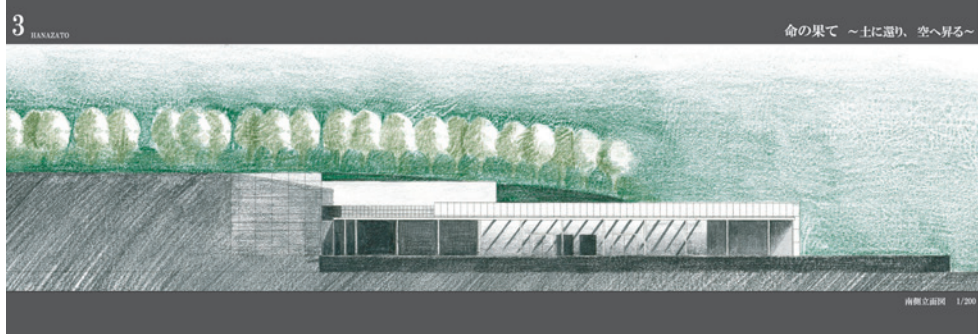
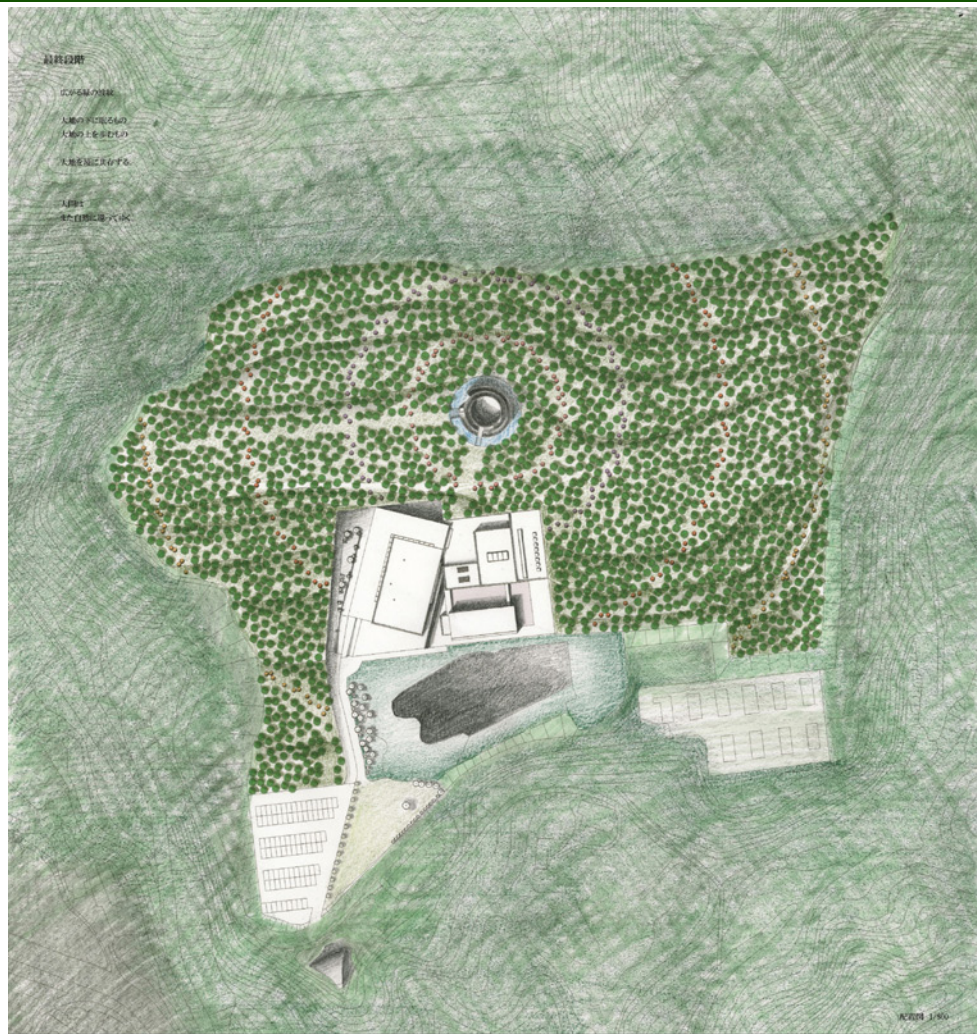
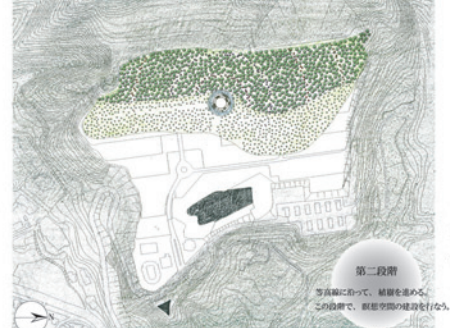
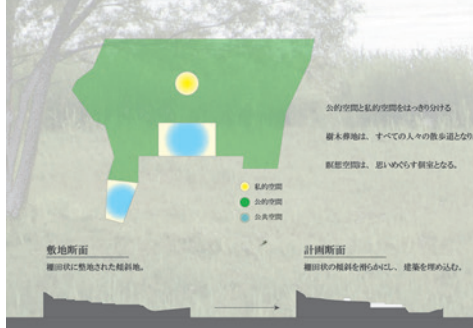
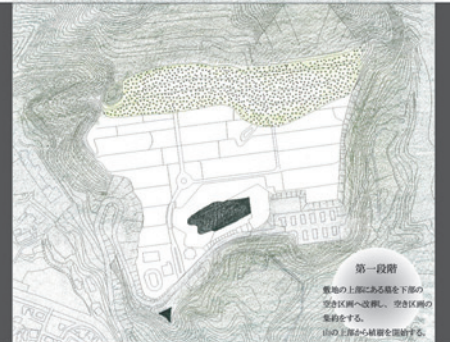
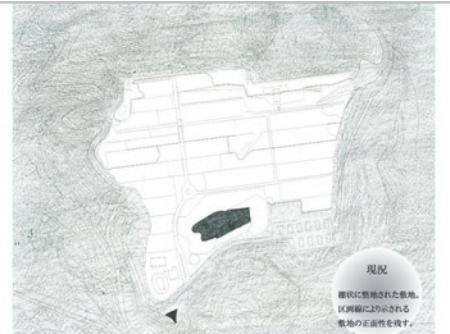
何の宗教に属しているのか。

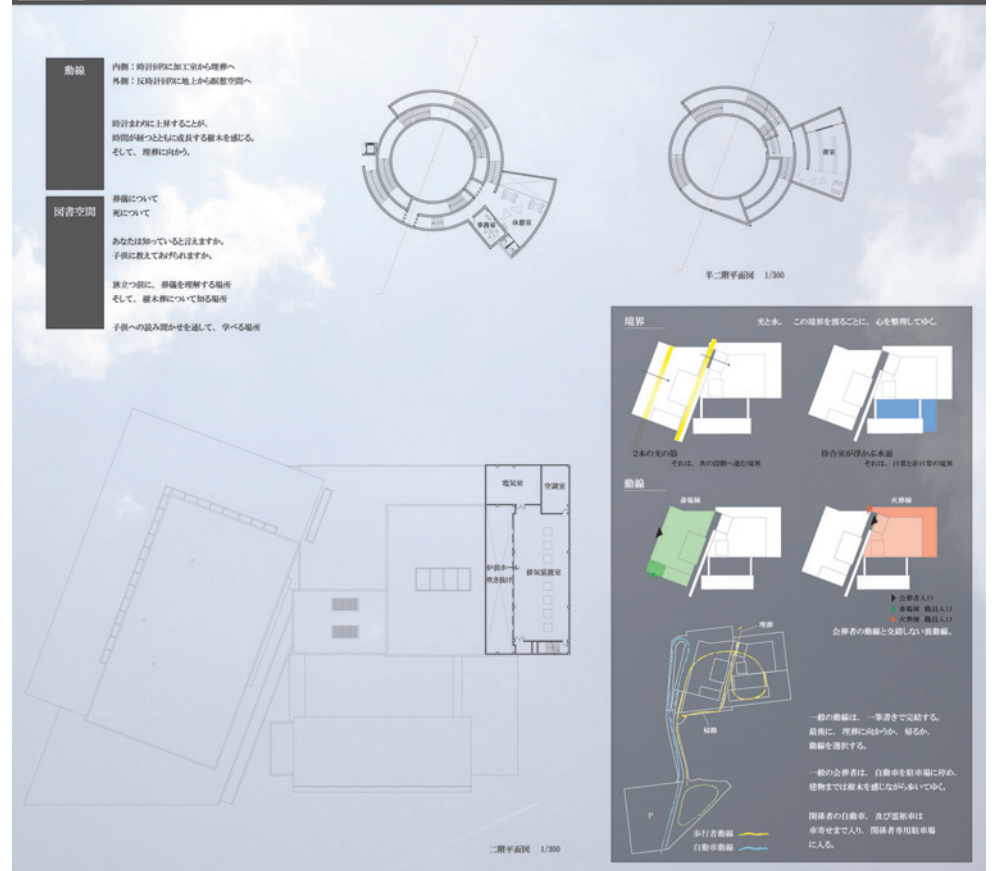
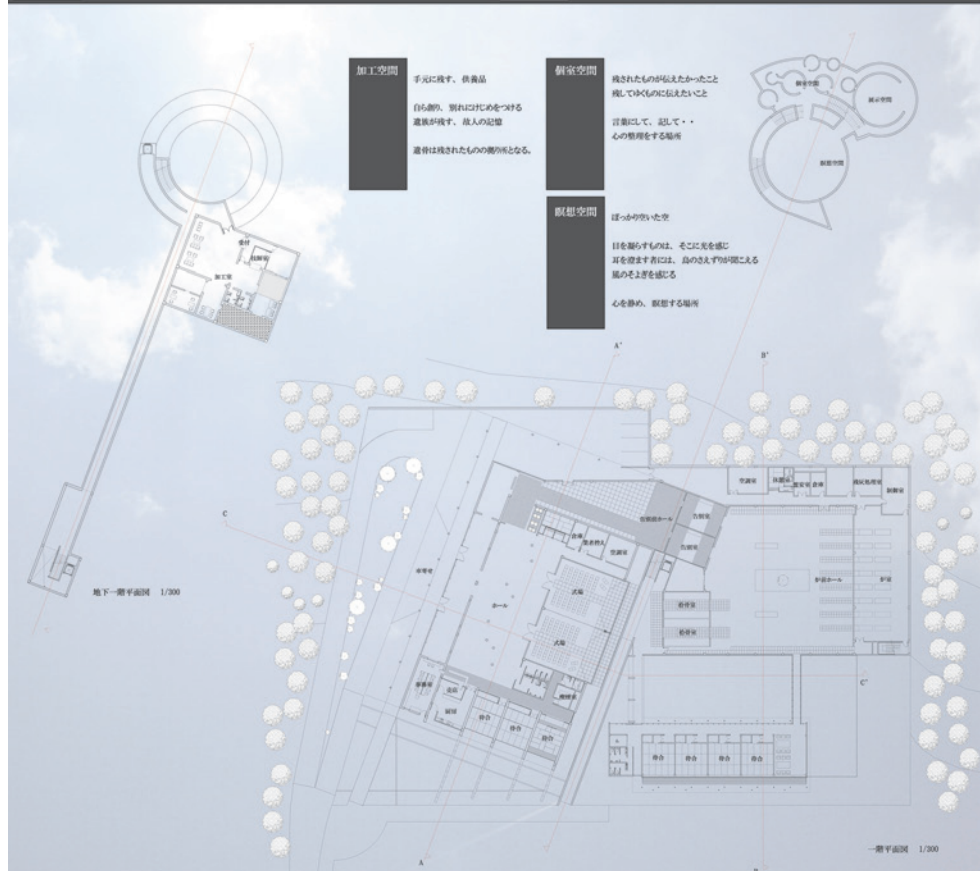
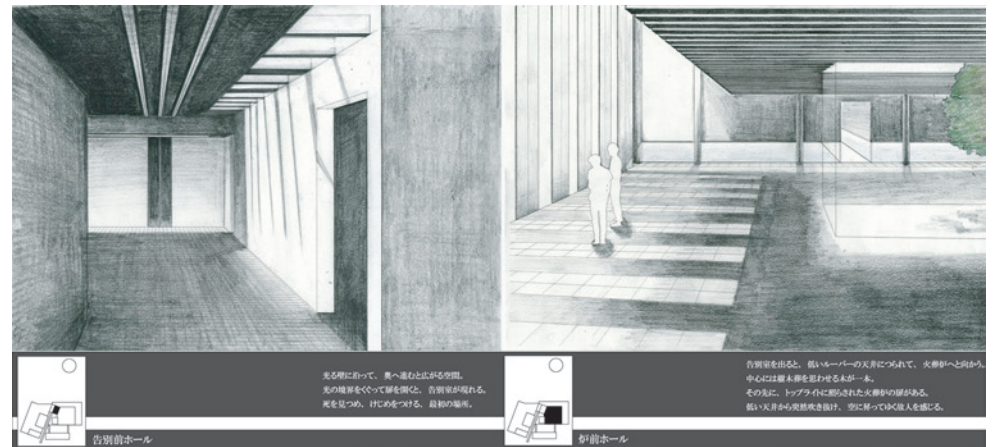
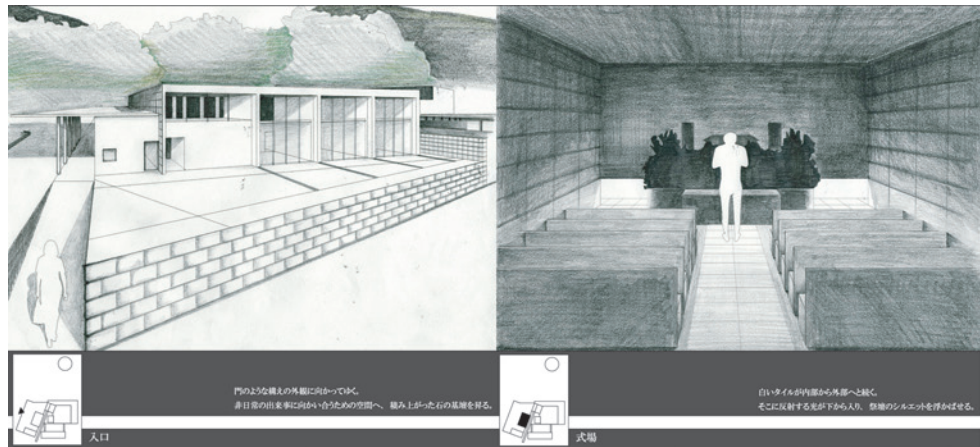
誰もが通る通過点について理解している人はどれだけの人がいるか。残してゆくものも考えているだろうか。

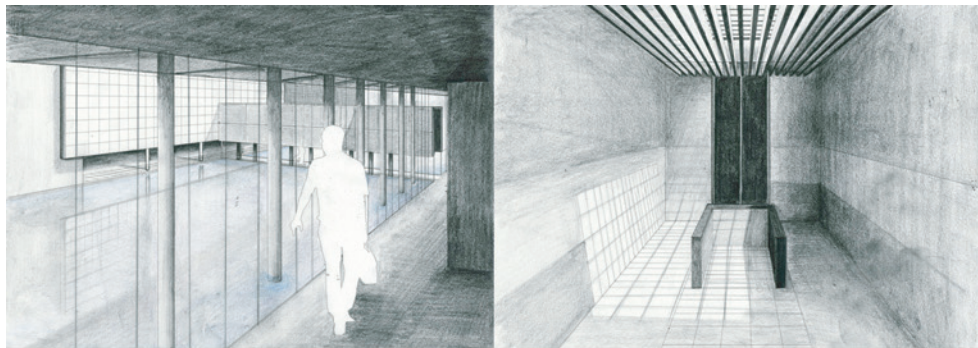
人間は必ず死ぬ。



埋葬は、別れにけじめをつける儀式なのである。





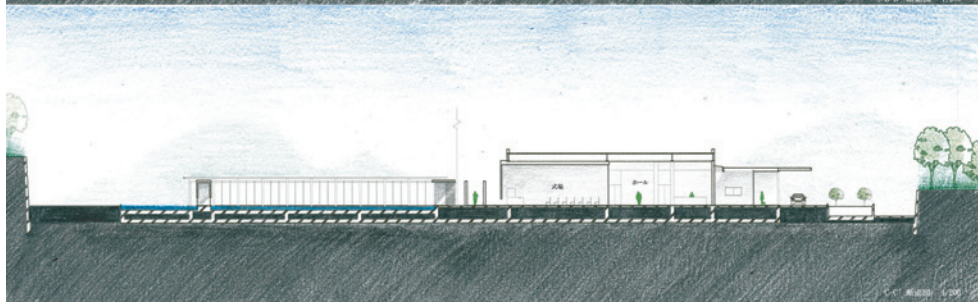
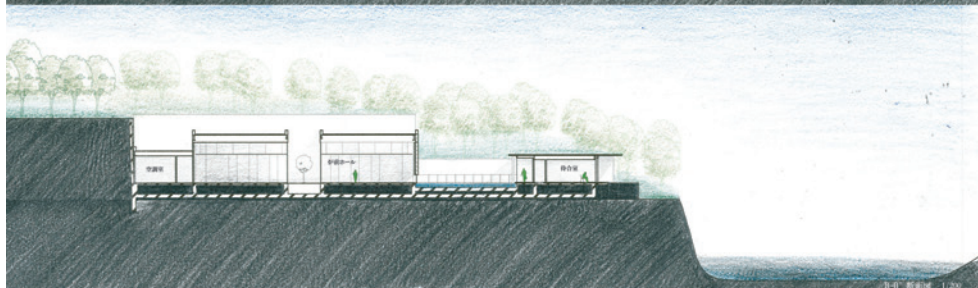




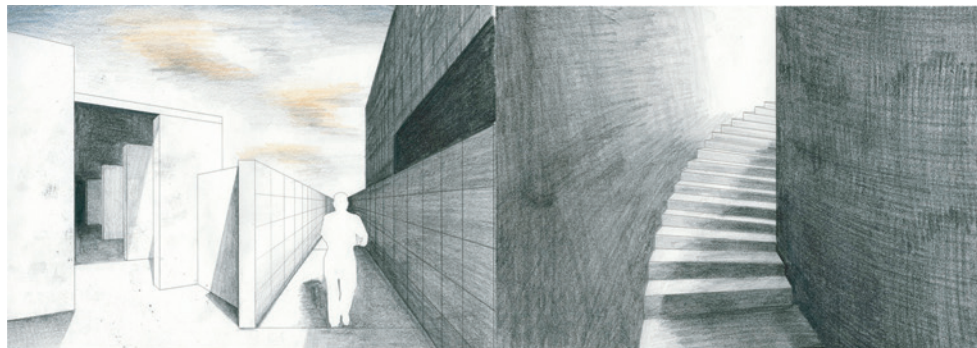



故人を弔へ送り、水面という境界を渡って待合室へ、
 が目の空間気を感じながら各々の部屋へ入ると、眺望が広がる。
 故人を見送り、別れへの思いを返す、水面に浮かんだ待合室。

大葬が終わると、待合室から拾骨室へ向かう。
 主役は残された者たち。
 木漏れ日の上のトランプを閉めて、これからの一歩を踏み出し始める。



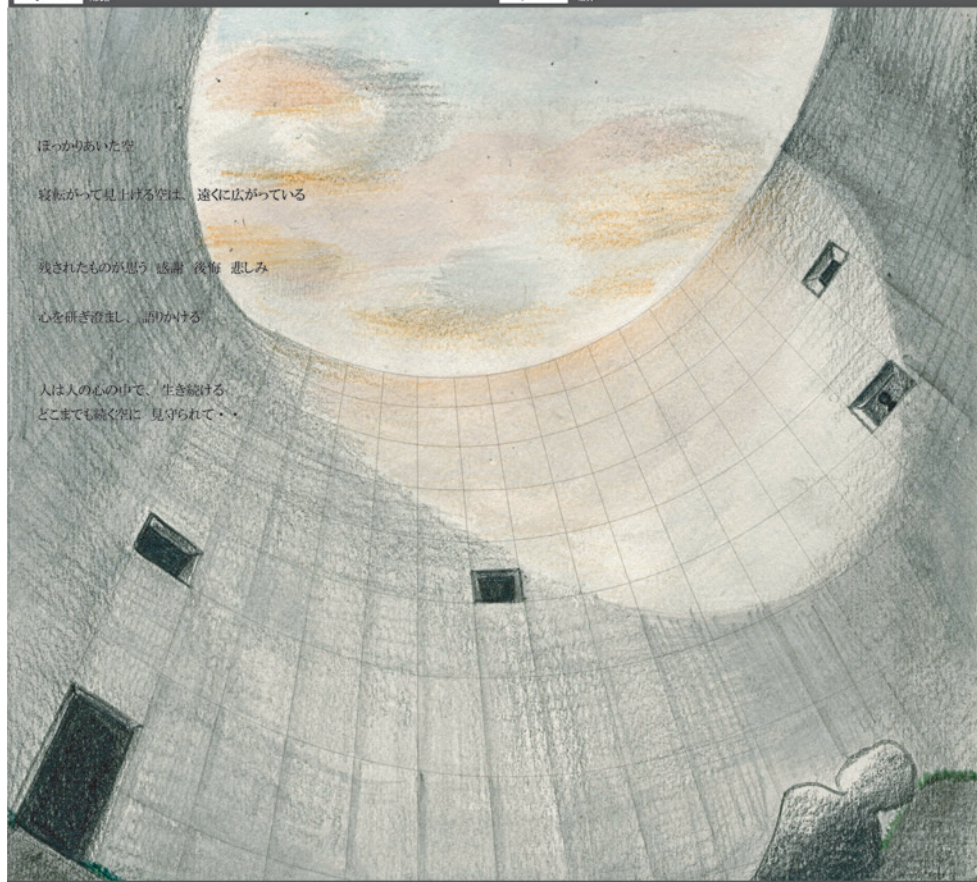
7 HANAZATO 0 5 10 20m 命の果て ～土に還り、空へ昇る～






拾骨を携え、帰宅する路。
 残されたこれからの時間を考える。
 ドアでトランプの先には、「平和の裏」が又にのびている。

拾骨の後、階段を一步一步踏み、地上を目指す。
 壁木が空へ向かって成長するように、地下から上昇すると、壁木葬地に出る。
 遠くレベルの建物は視界に入り、木々の影から眺めが広がる。



8 HANAZATO 命の果て ～土に還り、空へ昇る～